

# アレグザンダー・ポープ「サンズの幽霊」 (翻訳と解題)

大久保 友博(訳)

## はじめに

本稿は、18世紀英国で活躍した作家・翻訳家のアレグザンダー・ポープ(Alexander Pope)が執筆した諷刺詩「サンズの幽霊」(“Sandys's Ghost”, 1727)について、翻訳家と商業出版における最初期の関係を批判した重要な文献として本邦初訳を試み、近代英国および翻訳史上の理解に必要な情報も併せて簡便に提供するものである。構成は、まず日本語訳を掲げ、そののち解題として、底本テキストの検討、著者・内容・背景についての解説および註を記述する。

## 〔日本語訳〕

サンズの幽霊——オウィディウス『転身譜』新訳(素養ある人々によって翻訳が企図されたもの)についての真っ当かつ新たなバラッド(1727年、執筆1716年頃)

汝ら貴族平民諸君、町の  
機知ある道楽者たちよ、  
この詩を読み、誉れ高き  
書を少しでも訳す前に。<sup>(1)</sup>

羅旬作家みなに用心せよ！  
己の銀詩も顧みずして、  
むしろ金筆で書きなぐり、  
馬車内で書き散すとは！<sup>(2)</sup>

なぜならば銀釘の手箱も  
高価なる書きもの机も  
漆塗りの見事な筆立ても  
名文には無用の長物だ。<sup>(3)</sup>

聞け、幽霊が静夜のなか  
ざろりと炎のまなこで  
うらめしやと脅かすさま  
風流者の郷土を相手に。<sup>(4)</sup>

ポイボスの稀子、アモル！  
全ての詩神の全作品を  
啜えて運ぶのも朝飯前の  
飼い犬のごときものよ。<sup>(5)</sup>

噫！なぜ男は今の今迄  
お上品な詩をものして  
虚栄に焦がれたその魂を  
韻なる悪魔に売り渡す？<sup>(6)</sup>

男の持つ凝った手箱には  
光る飾り鉾が鏤められ、  
なかにサンズが潜む一方、  
オウィディウスは不在。<sup>(7)</sup>

悩み書き倦ねている所へ  
現れ出たは瘦躯の幽霊、  
手箱の鍵穴からすると  
鍵の如く直立して参上。<sup>(8)</sup>

口髭に帯に長袴をつけて、  
見事に整った襞襟の姿。  
郷土はたちまち筆落とし、  
傍ら灯は碧青と燃える。<sup>(9)</sup>

おい×殿！ と霊サンズ、  
書け、脅す心算はない、  
韻がうまくゆかぬのなら  
BやCに倣うがいいぞ。<sup>(10)</sup>

ヤコブが急かす太鼓の音、  
原著者には情けもない！  
まずへらへらPが来たる、  
慌てて靴下止めも忘れ。<sup>(11)</sup>

次に貴人諸公に郷土騎士、  
才人小才に半可通華族、  
Gは馴染みの町と店にて  
志願者をと掻き集める。<sup>(12)</sup>

FもGもやらぬと言って  
CもRもSまでもだめ、  
トム・Bとトム・Dとか  
DとSならやるかもと。<sup>(13)</sup>

当然Phのうすのろ頭に  
窮屈な韻が湧き出すと  
ペルシアの物語のように  
子守・子供騙しとなる。<sup>(14)</sup>

Wの詩神をAと組ませて、  
OのをH卿のと一緒に。  
TとAが二人力を合わせ、  
してPはJと共に訳す。<sup>(15)</sup>

あらゆる女性に跪くLと  
いう生気が漲る貴人は  
Fとの組みで参加の予定、  
まるでTとBのようだ。<sup>(16)</sup>

汝ら貴婦人も筆を進めよ、  
瑕疵一つもないように。  
男と同等の脳があるのは  
貴婦人Wがそのあかし。<sup>(17)</sup>

仏語辞書を見るがいいぞ、  
汝ら有能なる女たちよ！  
めったに本は書かずとも  
作り話はみなお手の物。<sup>(18)</sup>

さてTよ、部隊を数えろ、  
吟味の上で鼻数の確認。  
あわれ原著者にも珍妙な  
「転身譜」ができかねぬ。<sup>(19)</sup>

原書以上に奇天烈な訳本  
が居直りかねない始末。  
郷土これいかにと訊くと  
霊の答え——紙屑なり。<sup>(20)</sup>

## 〔訳者解題〕

### 1 底本テキストについて

本翻訳で使用した底本は、以下のものである。

N. Ault and J. Butt [eds.] (1954). *Alexander Pope: Minor Poems*. London and New Haven: Methuen and Yale University Press, pp.170-176.

現状で最も権威ある校訂版は、Twickenham Text とも通称される *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope* (1939-69)であり、上に掲げた底本もその第6巻にあたる。ここで扱った“Sandys's Ghost”はマイナー詩のため一般的な普及版にはあまり収録されないが、上記シリーズの抄録版 *The Poems of Alexander Pope: A Reduced Version of the Twickenham Text* (1963)には収められているため、そちらも参考にした。校訂版では、各人物の頭文字が、ポープ晩年の著作集で復元されたかたちで訂正されているが、ここでは伏せたままあとで解説する形式を取った。

### 2 原著者について

アレグザンダー・ポープが生まれたのは1688年5月21日のことで、ロンドンはロンバルド街プラウコート(Plough Court, Lombard Street)に住むリネン商の次男であった。母は後妻で、先妻とのあいだには男ひとり女ひとりを設けていたが、同名の長男アレグザンダーは赤子のときに早世していたため、9つ上の異母姉マグダレンだけが残ри、再婚はその養育のためでもあったらしい。

大陸で改宗したカトリック教徒の父を持つポープは、初等教育も身内の伯母から以外では、カトリック僧の家庭教師やカトリック教徒の学校から授かっている。ただ幼い頃から文才があった反面、教師を揶揄する諷刺詩を書いてしまったがために放校されてもいる。また文学への興味からこのロンドンで過ごした幼少時代(おそらく10歳頃)、好きすぎるあまり晩年の大文人ジョン・ドライデン(John Dryden, 1631-1700)の顔を一目見たいと、会いに行ったことさえあったらしい。

1700年頃に一家はウィンザーの森にあるビンフィールド(Binfield)という土地に移り住んだが、カトリック教徒では高等教育に制限があることから、ポープはそこで自学自習に励むことになる。その自由気ままに取り組める環境がかえってよかったようで、とりわけ古典の読書や異言語の勉強、さらには詩作・翻案に取り組んだと伝えられている。後年に異母姉が証言したところでは、読み書き以外のことを本当に何一つしなかったそうだが、不幸なことに15歳頃、骨結核からくる脊椎カリエスにかかり、17歳頃には生死の境を彷徨ってしまう。一命は取り留めたが、その後遺症で脊椎が湾曲して背の成長も止まり、成人してもなお身長は137cm しかなかったという。

ただ幸い縁には恵まれ、近隣に住む文学・古典好きの引退した老政治家ウィリアム・トランブル(William Trumbull, 1639-1716)の知遇を得て、療養のための乗馬をともにしながら文学を語り合いつつ、ドライデン訳の『アエネーイス』に助言したともされるこの老碩学に、ポウプは詩作を見てもらうことさえあった。この交流のなかで試みに訳したホメーロス『イーリアス』の一節を褒められ、継続を促されたことがのちの翻訳の遠因にもなっている。また人脈の上でも助けられ、最初の発病のあと語学の勉強のため再上京したロンドンでは、老文人の知己たちとのつながりもでき、なかでも博識な批評家であるウィリアム・ウォルシュ(William Walsh, 1662-1708)はポウプに大きな影響を与えた。そのとき執筆していた文壇デビュー作となる「田園詩」(*Pastorals*, 1709)や、訳し始めていたラテン詩人スタティウス『テーバイ物語』(Statius, *Thebaid*)第1巻の翻訳(1713)などは、ウォルシュが亡くなる直前の1707年夏にその豪邸で滞在した際、この人物の校閲を経たとされている。

やがて「田園詩」は、敏腕出版者ジェイコブ・トンソン(Jacob Tonson, 1655-1736)の目に留まり、当時人気のアンソロジーとして続々と出されていた『雑詠集』最終巻となる第6巻(*Poetical Miscellanies: the Sixth Part*, 1709)末尾に収録されることとなった。そのほか習作時代にものしたチョーサーの翻案や、前述の『イーリアス』部分訳も収められたのみならず、デビューを言祝ぐ仲間の詩が2篇入るなど、新人としての期待がうかがわれるものだった。

ただし彼のデビューした18世紀初頭の文壇は、野心あふれる文士たちのペンによる闘争が荒れ狂う時代で、互いに揶揄したり徒党派閥を作ったりといういざこざを作品そのもので行う場であった。ポウプはロンドンとウィンザーを行き来しながら、自ら文筆の戦場に加わりつつその諷刺の腕を上げ、諷刺文芸サークルのスクリブレラス・クラブ(Scriblerus Club)の結成を通じてジョナサン・スウィフト(Jonathan Swift, 1667-1745)ら文人連との交流も深めていった。若書きの詩『批評論』(*An Essay on Criticism*, 1711)や疑似英雄詩の『毛髪略奪』(*The Rape of the Lock*, 1712, 1714)もこの頃の作品で、その令名をはせていく。

20代にして有名詩人となったポウプだったが、当時の文士たちはまず貧乏で、ホメーロス『イーリアス』の翻訳を志したのも(かつての経緯はあれ)何より金銭のためであった。1713年頃から翻訳開始の趣意書が回覧され始めると、才ある若人が翻訳に従事することを嘆く者や、敵対する文士を邪魔しようという動きもあったが、事前の購入予約をそれまでの人脈を駆使して募ってみたところ、王侯貴族を含めて575人分も集まったという。当初の予定は1715年3月だったが印刷の都合もあり同年6月に第1巻が刊行、以降作業と並行して続刊されてゆくが、そのあいだ競合する新訳(Thomas Tickell 訳)が登場しながらも、完訳自体は1718年に脱稿、出版は1720年に完結した。原稿料だけでも約1000ポンドあったが、予約購入の販売分は前代未聞の5000ポンド近くにもなり(現代の価値ならば1000万円はゆうに超えようか)、この予約分はほとんどがポウプの取り分になった。このことから出版史家J・W・ソーンドースから「出版者以上に儲けた最初の作家」とも呼ばれている(Saunders 137)。

さてその実入りもあってか、1719年秋には、ロンドンから南西の郊外にあるトゥイックナム

(Twickenham)のテムズ川のほとりに、土地つきの小屋を手に入れ、邸宅に改装した上で母とともに(父は1717年没)移り住んでいる。この地は風光明媚な別荘地でもあり、直接的な少数のパトロンに拠らず出版で金銭的に大きく稼いだため、ポープは文筆を業として自立成功させた第一人者とも目されることにもなったが、彼自身「当代随一の独立作家」の自覚も生まれてきたという(コリンズ『十八世紀』146)。予約購入自体は形式としては「集団的パトロン」(Saunders 53)でまだ〈半パトロン制〉とでも言うべきだが、本そのものの価値をもって不特定多数(ないし固定複数)の読者さえ獲得できれば生計が成り立つことを示せたのは、文筆ないし翻訳が職業となりうる可能性を見せたという意味でも「文筆業の基礎を作った」(コリンズ『文筆業』21)と評価できる。あとは貴族に代わってある程度購入能力のある一般読者層が大量に登場すればよい。その後のポープは余裕を手にして、しばらく父の趣味でもあった造園を広い庭で(邸宅の下に洞室まで作って)愉しみながら、助手ふたりを得てホメーロス『オデュッセイア』翻訳(1725-26)とシェイクスピア全集(1725)の準備にじっくり時間をかけて取り組んでいる。

まさに成功者の悠々自適な生活を数年間続けたわけだが、翻訳と全集の完成によってロンドンの文壇ではまた話題と論争が持ち上がり、ふたたびポープは文筆の世界へ帰ってくることとなる。古典を愛するポープからすれば、墮落した三文文士たちが足を引っ張り、文学を汚しているようにでも見えたのか、その『愚物列伝』(*The Dunciad*, 1728, 1729, 1742, 1743)では増補を重ねながら文壇に対して徹底的な諷刺を行った。またスウィフトと組んで『雑詠集』(*Miscellanies*, 1727, 1728, 1732)を立て続けに刊行したり、『人間論』(*An Essay on Man*, 1733, 1734)など宗教的な詩も発表したり、またはホラーティウスの翻案詩(1733, 1734, 1737, 1738)に取り組んだり、そのあと活発な筆は休まることがなかった。しかし1740年代に入ってから若頃のカリエスを素因とする肺気腫と喘息を病んで健康を崩しており、1744年には療養に努めていたが、5月30日の夕べにトゥイックナムの邸宅で息を引き取っている。

### 3 背景・内容について

1716年当時、古代ローマの詩人オウィディウスがギリシア神話のなかでも姿の変わるエピソードを中心にまとめあげた『転身譚』の新訳については、ふたつの出版企画が動いていた。ひとつは悪名高い出版者エドモンド・カール(Edmund Curll, 1675-1747)のもとで三文文士の役割を買った医師ジョージ・シューエル(George Sewell, d.1726)が編集したもの。もうひとつは、前述トンソンが出版元となって、こちらも医師・詩人のサミュエル・ガース(Samuel Garth, 1661-1719)が編者となったものである。このポープの詩「サンズの幽霊」で主に触れられているのは彼自身直接参加した後者のガース＝トンソン版で、刊行が1717年7月であるから、執筆されたのはその前ということになる(ただしいち早く1716年10月刊行された前者シューエル版にもポープが若いときに訳した一節が転載され組み込まれている)。

トンソンが17世紀末に、ジョン・ドライデンとともに始めたギリシア・ローマ古典の共訳出版は本人が切り開いた当たり企画で、その刊行には複数人の作業から比較的早く完成させられ

る利点とともに、名のある作家を揃えれば翻訳の競演として魅力的にも映る効用もあるのだが、ひとつの作品としては不統一になるという欠点もあった。ガースが編者になったこの書籍では、まず故ドライデンが部分的に訳していたものを基に、残りを『雑詠集』などで発表された既訳のほか新訳で補うというつぎはぎの代物である(ガース自身は第14巻担当)。

肝心の売れ行きは好調で1世紀のあいだに版を少なくとも13回は重ねており、出版競争としてはこのガース＝トンソン版に軍配が上がる。19世紀末、幼少のころにこの版を読んだというアメリカの怪奇作家H・P・ラヴクラフトが「見事な文芸モザイク」と称していることから、その人氣が根強かったことがわかる(Lovecraft 7-8)。文学研究の観点からは、最初にガース＝トンソン版の研究を博士論文としてまとめたW・F・ドワイヤーが「不活性なあまり佳作の寄せ集めとも言えない」と手厳しい評をしているが(Dwyer 334)、近年の研究では、自由度の高い訳出で変身譚そのものよりも、むしろ神々英傑の情感をそれぞれの個性で豊かに描いたとして、かえって「神話を脱神話化」するものと評価されている(Morton 155)。

その総勢18人の参加者も確かに豪華で、すでに名高かったジョセフ・アディソン(Joseph Addison, 1672-1719)や直後に桂冠詩人となるローレンス・ユースデン(Lawrence Eusden, 1688-1730)をはじめ、元桂冠詩人ネイハム・テイト(Nahum Tate, 1652-1715)にジョン・ゲイ(John Gay, 1685-1732)の名も見える一方、ポープ自身も第9巻のひとつの逸話を受け持ち(“The Fable of Dryope”)、友人ウィリアム・コングリーヴ(William Congreve, 1670-1729)も第10巻の2エピソードを訳しているから、トンソンとガースが自分たちの人脈を手当たり次第に声かけしていたことが見て取れる。

つまりこの諷刺詩「サンズの幽霊」では自分の身内、あるいはそこに寄与した自分自身の態度をも自虐的に揶揄していることになる。当時のポープは予約出版をうまく活用して収益を上げていたことから、意識的に出版行為を捉えている反面、出版の行き過ぎた商業化・売文業化に警鐘を鳴らす人物でもあった。手稿で回覧されたものだから当然内輪のユーモアでもありながら、当事者としての複雑な気持ちが表れているこの詩だが、ここでは連ごとに註のかたちで解説を加えながら、その表現を追いかけてみたい。

(1)表題通り、新訳が企画されていることへの牽制のニュアンスがある。貴族・平民・道楽者と呼ばけけるのも、共訳者として居並ぶ人々の多様さを表したもののだろう。

(2)オウィディウスは、金・銀・青銅・鉄と時代を分け、下るほどに劣化していくものと考えたから、ここでは古典詩人たちよりも現代の詩人たちが下手だということで、自身の拙劣な詩才では金筆も宝の持ち腐れという皮肉が入っている。もちろんホメーロス訳している最中の自身も例外ではないだろう。馬車内で書くというのは、敵視される文士リチャード・ブラックモア(Richard Blackmore, 1654-1729)が詩の拙さを馬車のなかで書いたように喩えられたことに拠る。

(3)道具ばかり揃えても名文は書けない、というのは貧乏文士としての矜持。

(4)著者手稿ではS-m M-xと読めるため伝統的には天文学者サミュエル・モリノー(Samuel



Molyneux, 1689-1728)が郷土と推定されているが、別段この翻訳に関わっているわけではなかったため、説得力に欠ける。自身の原稿が転載されることから対抗企画の存在をポープが知っていたとして、残されたイニシャルから大胆な推測を試みれば、Sewall's Metamorphoses (S-W-M-s)の擬人化と解釈できるかもしれない。シューエル版刊行直前あたりでトンソンが人のかき集めていた事実と考え合わせると、うまく実情に合った描写になる。

(5)ポープの別作品『アーバスノット博士への手紙』では、町をよろよろ歩く犬がへば詩人の喩えとして登場する。翻訳は簡単だとか、自分は訳が上手いだとか嘯く者に限って、たいへん下手であるもの。

(6)脚韻のある英雄対句で詩を書くと、当時は幾分か教訓くさく大仰に響くこともあった。ポープの諷刺詩はこの効果を利用して、下らないことを大げさに唱って笑いを生んだが、そのことから真面目な翻訳では下手をすると滑りやすい。

(7)ジョージ・サンズ(George Sandys, 1577-1644)は『転身譜』の先行訳者。原作者がおらず訳者のみなのは、原典を読まずに既訳書を虎の巻にする事への揶揄にもなる。

(8)サンズは、過酷な海上や生活もままならないヴァージニア植民地で、『転身譜』の大半を訳出した。瘦躯なのは幽霊のイメージのほか、こうした伝記的エピソードも考慮されているか。

(9)実際のサンズの肖像が反映されている。サンズ訳『転身譜』の1690年第8版から前世紀の王党派然とした肖像画が追加された。

(10)Bは、文士ユースタス・バジエル(Eustace Budgell, 1686-1737)で、ポープ『愚物列伝』『博士へ』でも揶揄の対象にされた。アディソンの係累で、当時彼に敵視されていると思ったポープにはその点も面白くなかったようだ。Cは政治家ウォルター・ケアリ(Walter Carey, 1685-1757)で、こちらも気取り屋として再三馬鹿にされた。すなわち、真似してはいけない人々を引き合いに出している。×は後年「サム」と補われている。

(11)もちろん、この新訳企画の出版元ジェイコブ・トンソンのこと。原稿を取り立てるイメージが太鼓として表現される。そしてPは、政治家トマス・ペラム＝ホルス(Thomas Pelham-Holles, 1693-1768)でのち首相になった貴族だが、ここは若く愚鈍なパトロンの象徴として登場する。

(12)新訳の编者たるサミュエル・ガースは諷刺詩を得意としたが、原文で示されたその馴染みの町セント・ジェイムズ街のホワイツ・チョコレートハウスでは、賭け事好きの文士たちがよく集まった。つまり、訳者の募集をかけても、ろくでもないやつしか集まらない。

(13)Fのイライジャ・フェントン(Elijah Fenton, 1683-1730)はポープの翻訳・編輯助手となった人物、ゲイとコングリーヴは既出、Rのニコラス・ロウ(Nicholas Rowe, 1674-1718)はこのときの桂冠詩人、スタニヤン(Stanyan, 該当人物は複数いるが未確定)、いずれもポープの作家友だちのうち四人は実際に翻訳に参加したのだが、頼れる彼らはここでは助けてくれないことになっている。トマス・バーネット(Thomas Burnet, 1694-1753)、トム・ダーフィ(Tom D'Urfey,

1653-1723)、ジョン・ダントン(John Dunton, 1659-1733)、リチャード・ステール(Richard Steele, 1672-1729)、いずれもポウプに「愚物」か敵と指さされた者どもで、逆に参加されても困るという意味で登場している。ただしステールとは執筆当時まだ交友関係が破綻していないため、当初は別の人物が指されたとも言われている。

(14)アンブローズ・フィリップス(Ambrose Philips, 1675-1749)は、ポウプがデビューした『第6雑詠集』で同じく「田園詩」を書いてポウプ以上に評価されてしまって以来ずっと敵視され、『愚物列伝』でも鈍重な詩を書いたと揶揄されている。子ども向けに書いた『ペルシア物語』が感傷的すぎるとして、“Namby-Pamby”(甘々弱々)のあだ名がある。

(15)Oはライバル翻訳家のジョン・オージル(John Ozell, d.1743)で、中途半端の象徴とされる。ウォリック伯(Edward Rich, 7th Earl of Warwick, 1698-1721)もオージルと同じくアディソンの係累だが、AとHは未詳。TとAも敵視された文士トマス・ティッケル(Thomas Tickell, 1685-1740)とアディソンで、ポウプ訳『イーリアス』と対抗するかたちで現れたティッケル訳の黒幕がアディソンだと勘ぐられたため、ここではコンビで出てきている。Pはポウプ自身で、Jは友人チャールズ・ジャーバス(Charles Jervas, 1675-1739)、画家として活躍してポウプにも手ほどきしたが、のち『ドン=キホーテ』の訳者としても知られる。

(16)LとFの候補はいるがやや不明確。桂冠詩人ネイハム・テイトと聖職者・詩人ニコラス・ブレイディ(Nicholas Brady, 1659-1726)は、ふたりで『詩篇』や賛美歌の英詩韻文化を試みた。なお、この連は手稿にはない。

(17)メアリ・ワートリー・モンタギュー(Mary Wortley Montagu, 1689-1762)、社交界で人気の教養ある貴婦人。一時ポウプの隣人で、彼は好意を持ってのちに告白するが、相手にされずあしらわれ、そのあとは批判対象に転じてしまった。

(18)この連は手稿のみ。古典詩を散文に訳す仏国アンヌ・ダシエ(Anne Dacier, 1654-1720)らのことを暗示するか。ダシエの古典翻訳は、英国でも翻訳の種本として重宝され、原典から訳さずに彼女の訳から重訳・翻案されることも少なくなかった。

(19)再び出版者トンソンのこと。先述の通りこの頃、出版上の要請から分担共訳も少なくなかったが、そのため訳質が不統一のこともあり、頭数を揃えたからと言って必ずしも本全体としての完成度が高くなるわけではない。

(20)盡すなわち先行訳者サンズは、長年かけて完訳し、数度の改訳も行っているほど手をかけた。そのため拙速な共訳には手厳しい評価を下すのだろう。もちろん、この詩の執筆当時、ポウプが膨大な時間を掛けてホメーロスをひとりで訳していることも、この判断の動機のひとつだと思われる。

こうしてこの戯れ歌のごときバラッド「サンズの幽霊」では、拙速な共訳(ないし旧訳のリライイト)が揶揄されるわけだが、自虐的に言及されるこの共訳体制はドライデン=トンソン以後すでにならかなり商業化されており、その商業的側面を活用するのはポウプもまた同じである。ただその出来を気にしているものの、文筆で金銭を稼ぐことを否定しているわけではない。商業



化の弊害として現れる三文文士や出版者による文学の陳腐化・劣化・墮落を苦々しく思いつつ、自分の文学の目的を果たすためにも自覚的に業としての文筆へ参加しているポープ自身の相反する自己認識が、こうした自虐とも言える諷刺詩を生んだのだろう。

### 主要参考文献

- Allen, R. J. (1933/1967). *The Club of Augustan London*. Hamden: Archon Books.
- Bloom, H. [ed.] (1986). *Alexander Pope*. New York: Chelsea House.
- Brower, R. A. (1959/1968). *Alexander Pope: The Poetry of Allusion*. Oxford: Oxford University Press.
- Butt, J. [ed.] (1963/1969). *The Poems of Alexander Pope: A Reduced Version of the Twickenham Text*. New Haven: Yale University Press.
- Butt, J., M. Mark et al. [eds.] (1939-69). *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*. 11 vols. London and New Haven: Methuen and Yale University Press.
- Cashmore, T. H. R., D. H. Simpson and A. C. B. Urwin. (1988). *Alexander Pope's Twickenham: 18th Century Views of his "Classic Village"*. Twickenham: Borough of Twickenham Local History Society.
- Davis, P. (2008). *Translation and the Poet's Life: The Ethics of Translating in English Culture, 1646-1726*. Oxford: Oxford University Press.
- Dwyer, W. F. (1969). *Profit, Poetry, and Politics in Augustan Translation: A Study of the Tonson-Garth Metamorphoses of 1717*. Doctoral Thesis at the University of Illinois.
- Fraser, G. S. (1978). *Alexander Pope*. London: Routledge.
- Gillespie, S and D. Hopkins [eds.] (2005). *The Oxford History of Literary Translation in English: Volume 3, 1660-1790*. Oxford: Oxford University Press.
- [eds.] (2008). *The Dryden-Tonson Miscellanies, 1684-1709*. 6 vols. Tokyo: Edition Synapse.
- Greater London Council. [ed.] (1980). *Alexander Pope's Villa: Views of Pope's Villa, Grotto and Garden: A Microcosm of English Landscape*. London: Greater London Council.
- Hayes, J. C. (2009). *Translation, Subjectivity and Culture in France and England, 1600-1800*. Stanford: Stanford University Press.
- Hopkins, D. (1988). "Dryden and the Garth-Tonson Metamorphoses". *RES* 39 : 64-74.
- [ed.] (1999). *Homer: Selected Verse from the Iliad and the Odyssey: Translated by Alexander Pope*. London: Dent.
- Kinney, D. [ed.] (2012). *Ovid's Metamorphoses, tr. Samuel Garth et al. (London, 1717): A Modernized Online Edition*. Charlottesville: University of Virginia Library. < <http://ovid.lib.virginia.edu/va1717/>>
- Knight, D. (1951). *Pope and the Heroic Tradition: A Critical Study of His Iliad*. New Haven: Yale University Press.
- Lovecraft, H. P. (1964). *Selected Letters I, 1911-1924*. Sauk City: Arkham House.
- Mack, M. [ed.] (1964). *Essential Articles for the Study of Alexander Pope*. Hamden: Archon Books.
- (1985/1988). *Alexander Pope: A Life*. New York: Norton.
- Morton, R. (2013). *The English Enlightenment Reads Ovid: Dryden and Jacob Tonson's 1717 Metamorphosis*. New York: AMS Press.
- Oakley-Brown, L. (2006). *Ovid and the Cultural Politics of Translation in Early Modern England*. Aldershot: Ashgate.
- Quennell, P. (1968). *Alexander Pope: The Education of Genius, 1688-1728*. London: Weidenfeld.
- Root, R. K. (1962). *The Poetical Career of Alexander Pope*. Gloucester, Mass.: Smith.
- Rosslyn, F. [ed.] (1985). *Pope's Iliad*. Bristol: Bristol Classical Press.
- (1990). *Alexander Pope: A Literary Life*. Basingstoke: Macmillan.

- Saunders, J. W. (1964). *The Profession of English Letters*. London: Routledge.
- Shankman, S. [ed.] (1996). *The Iliad of Homer: Translated by Alexander Pope*. London: Penguin.
- Sherburn, G. (1934/1968). *The Early Career of Alexander Pope*. Oxford: Clarendon Press.
- Sowerby, R. [ed.] (1988). *Alexander Pope: Selected Poetry and Prose*. London and New York: Routledge.
- (2006). *The Augustan Art of Poetry: Augustan Translation of the Classics*. Oxford: Oxford University Press.
- Steiner, G. [ed.] (1996). *Homer in English*. London: Penguin.
- Tissol, G. [ed.] (1998). *Ovid: Metamorphoses: Translated by John Dryden and others, edited by Sir Samuel Garth*. Ware: Wordsworth.
- Yano, K. [ed.] (1950). *Select Poems of Alexander Pope*. Tokyo: Kenkyusha.
- 岩崎泰男 [訳] (1990) 『アーバスノット博士への手紙 風刺への序言として』 英宝社
- 大久保友博 (2012a) 「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・ドライデン 前三篇」『翻訳研究への招待』 7: 107-124.
- (2012b) 「ロスコモン伯『訳詩論』と翻訳アカデミー」『関西英文学研究』 6: 13-20.
- (2014) 「『転身譜』第15巻跋詞の訳におけるジョージ・サンズの変容」『京都大学大学院人間・環境学研究科 歴史文化社会論講座紀要』 11: 55-65.
- (2015a) 「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・ドライデン 後四篇」『翻訳研究への招待』 13: 83-102.
- (2015b) 「ドライデンの翻訳論と中庸の修辞」『十七世紀英文学を歴史的に読む』 金星堂、211-231.
- 呉茂一 [訳] (1969) 『ホメーロス イーリアス オデュッセイア』 河出書房新社
- コリンズ、A・S (1994) 『十八世紀イギリス出版文化史 作家・パトロン・書籍商・読者』 (青木健・榎本洋 [訳]) 彩流社
- (1999) 『文筆業の文化史 イギリス・ロマン派と出版』 (青木健・榎本洋 [訳]) 彩流社
- ジョンソン、S (2009) 『イギリス詩人伝』 (小林章夫 [ほか訳]) 筑摩書房
- 高谷修 (2014) 『ギリシア・ローマ文学と十八世紀英文学 ドライデンとポープによる翻訳詩の研究』 世界思想社
- 福本宰之 (2000) 「アレグザンダー・ポープ」『イギリス詩を学ぶ人のために』 (東中稜代・小泉博一 [編]) 世界思想社、93-100
- (2000) 「ポープ マータイナス先生の面目」『週刊朝日百科 世界の文学』 59: 266-268.
- (2002) 「ポープの出版戦略」『英語青年』 148 (2): 90-91.
- (2011) 「職業作家ポープ? カールとの対比から見える新しい詩人観」『龍谷大學論集』 477: 34-47.
- 矢野禾積 (1955) 『ALEX. POPE』 研究社